様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３３２０１９１

研究課題名（和文）消費様式から見た国民文化形成の文化人類学的研究：インドネシア等の生活用品調査から

研究課題名（英文）Anthropological study on the formation of national culture in consumption style: A case study in Indonesia

研究代表者
鏡味　治也（Haruya, Kagami）

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：２０２２４３３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：　生活用品に関する情報収集の基本となる用品リストについて、試行的なデータ収集を試みながら参加者で意見交換し、衣食住や宗教関係用品およそ75項目からなるリストを完成させた。衣については外出着やふだん着、寝間着、上着や下着など約20項目、食については調理具や食器など約20項目、住については間取りや家具、通信機器など約25項目、宗教関係では約10項目を、生活に必需の基本用品としてあげた。５年間の現地調査でインドネシア各地に居住する10の民族の約60軒の家庭から、上記リストをもとに生活用品のデータを収集した。さらにタイ、シンガポール、オランダでもデータを収集し、比較検討しながら分析・考察を行った。

研究成果の概要（英文）：The study group made a list of house utensils which are thought to be necessary goods for a family life in the region, and collect data of such house utensils in the various regions in Indonesia. The list contains the basic house utensils amounting 75 goods, including cloths, kitchen utensils, house and furnitures, sanitary goods, and so on. During 5 years research period, each member of the study group conducted field research with visiting 60 more households to collect data on house utensils. The visited households spread throughout Indonesia, and some tentative data-collecting were conducted in Thailand, Singapore and The Netherlands. The collected data in document and photograph were shared among the study group and were used for comparative analyses and discussion.

研究分野：文化人類学

キーワード：生活用品　消費様式　国民文化形成　インドネシア

１．研究開始当初の背景

(1)本研究代表者はインドネシアの国民文化形成・普及と、その中でのバリ島住民の民族文化の位置づけ・継承のダイナミックな関係を探究してきた。
(2)その研究を進める中で、国家整備の進展や経済発展による社会変化を通じて国内各地の生活様式が均質化されつつあることも観察してきた。それは衣食住の基本的生活必需品の均一化に見て取れる。とりたてて国家を意識しないで進むこうした生活様式の均質化もまた、国民文化形成を支える重要な側面であり、生活用品リストを指標に検証することで、国民レベルの生活様式の均質化がどの程度進み、民族文化要素がどの程度維持され、またそうした均質化と民族特性の維持が国家間でいかに異なるかを明らかにしうると確信し、本研究を着想・企画するに至った。

２．研究の目的

(1)本研究は、インドネシア各地・各層の家庭の**生活用品リスト**を作成して、その各品目の名称、形態、様式、入手先等を比較し、それぞれが国内でどの程度汎用化・均質化しているのか、また民族文化的要素はどのような品目に現れるのかを検証するとともに、隣国の同様のリストと比較し、国ごとの特性がどの品目のどのような要素に顕現するかを明らかにすることを課題とした。
　衣食住に関わる生活必需品の調達は、自然環境や民族慣習のほか、製造販売の状況や宣伝等によっても左右される。教育の普及や就業構造の変化などにより生活様式が近代化するにつれ、工場製品の購買・使用が増え、国内どこでも誰でも同じようなモノを使うようになっていることが予測される。同じ名称・様式のものを使って生活することは文化の共有であり、それが国内で均質化していることは（ひとつの）国民文化の共有にほかならない。一方そこに特定の民族固有の品目が見いだせれば、それは民族文化が規定する要素であり、意識的になされる選択の結果と言える。こうして国民文化と民族文化の関係が、モノの消費という側面で、「意識されない国民文化」対「意識された民族文化」という構図で明らかになる。さらに国家間比較によりインドネシアの独自性と東南アジア海域世界の共通性も明らかにしうる。

３．研究の方法

(1)本研究では、比較する生活用品の品目を洗い出してリスト化するための国内打ち合わせと、作成したリストに基づいてインドネシア国内外各地の家庭で実際に使われているものを調べるデータ収集を作業の軸として構成した。一家庭の生活用品は膨大な数にのぼるが、本研究は生活用具の悉皆調査を目指すのではなく、生活様式の骨組みとなる衣食住を基本に、民族や国の違いを浮かび上がらせやすい品目にしぼってリスト化し、その内容を国民文化の形成と民族文化の維持という観点から比較検討することを目的とした。さらに本研究を通して世界の他地域でも使用しうる汎用リスト作成を目指した。リスト検討等の国内打合せは本研究参加者全員が集まって行った。
(2)現地調査は本研究参加者が手分けして、まずインドネシア国内各地で行い、後半で隣国のシンガポール、タイ、フィリピンに広げた。インドネシア国内の調査地選定では、民族や宗教、都市部と農村部、ジャワ・バリ島とその他のいわゆる外島といった中心と周縁の違いに留意した。隣国での調査は、国家間の違いが浮き彫りになりやすい品目にしぼり、かつ民族や宗教、また都市部と農村部の違いに留意して行った。各地域での収集データはオンライン上の非公開ページでデータベース化して参加者間で共有しつつ、国内打合せで収集資料を紹介し合って整理・分析・考察を進めた。
(3)研究組織は、研究代表者の鏡味治也、森山幹弘、研究分担者の中谷文美、長津一史、津田浩司、金子正徳、研究協力者の阿良田麻里子、森田良成という、いずれもインドネシアで長い調査経験を持つ研究者で構成し、研究をスタートさせた。途中金子を研究分担者から研究協力者に配置変えし、また山口裕子を研究協力者に加えた。

４．研究成果

(1)生活用品に関する情報収集の基本となる用品リストについて、試行的なデータ収集を試みながら参加者で意見交換し、衣食住や宗教関係用品およそ 75 項目からなるリストを完成させた。衣については外出着やふだん着、寝間着、上着や下着など約 20 項目、食については調理具や食器など約 20 項目、住については間取りや家具、通信機器など約 25 項目、宗教関係では約 10 項目を、生活に必需の基本用品としてあげた。
(2) ５年間の現地調査で約 60 軒の家庭から上記リストをもとに生活用品のデータを収集した。収集対象とした地域・民族は、ジャワ島のジャワ人、スンダ人、華人、バリ島のバリ人、ロンボク島のササク人、ティモール島のアトニ人、ブトン島のブトン人、スマトラ島のランプン人、カリマンタン島の華人、カリマンタン島やカンゲアン島のサマ人に及ぶ。さらにシンガポールや北タイ、フィリピン,オランダでも試行的なデータ種集を行った。データは項目リストに記入した名称や入手時期などの文書データと、項目品ごとの写真データである。収集データはオンライン上の非公開ページでデータベース化して参加者間で共有した。
(3)生活用品リストという共通データをもと

に、異なる地域、異なる民族の生活様態を比較することが可能になった。ただ、今回集めたデータで見るかぎり、インドネシア国内の、特に都市化した環境に暮らす人びとの顕著な民族間の生活様態の差異は見いだせなかった。これは近代的な生活様態において共通の国民文化がすでに行き渡っていることを示す。宗教面でも同一宗教であれば民族間の差はみられなかった。
(4)生活用品の顕著な違いが見られたのは、農村部での伝統家屋での生活から近代的な家屋での生活に移ったときの変化である。これには日常生活の内容構成の変化のほか、生活インフラの近代化による生活様式の変化（近代化）が大きく影響している。この変化は、生活用品リストを使って聞き取りをすることで、非常に効率的かつ具体的に家族生活の変化を浮かび上がらせることが出来た点である。生活用品調査は対象家族のライフ・ヒストリーを調査するのにうってつけの手法であることが確認できた。
(5)国別の比較では、インドネシア以外での資料収集が試行的なものにとどまったため、いくつかの品目で興味深い違いは見られたものの、生活用品構成全体にわたる大きな違いは見いだせなかった。とくに東南アジア内の諸国でそれが顕著で、他方オランダの事例はそれとかなりの違いを見せ、世界規模でデータを集めれば面白い違いが浮かび上がることを示した。
(6)本研究では大学院生に生活用品リストを使ってインドネシア、タイ、中国の家庭のデータを集めさせることも試みた。生活用品リストを使った調査は、その地域その民族の生活様態を知る初期調査で有効であること、また現地調査を始めたばかりの者にとって聞き取りの手がかりを与えるものとして有効であることを確認できた。
(7)生活用品データをもとにしたインドネシア国内諸地域諸民族の生活様態を描き出す成果報告書は現在企画編集中である。生活用品リストを使ったデータ収集の過程で浮かび上がった生活様態の変化等の調査成果は、次にあげる参加各人の著書・論文等で随時公表してきた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①NAGATSU, Kazufumi, “Social Space of the Sea Peoples: A Study on the Arts of Syncretism and Symbiosis in the Southeast Asian Maritime World.” *The Journal of Sophia Asian Studies* 33: 111-140, 2016, 査読有
② NAKATANI, Ayami, “Dressing Miss World with Balinese brocades: “Fashionalization” and “Heritagication” of handwoven textiles in Indonesia”, Textile: Journal of Cloth and Culture 13(1): 2-21, 2015,査読有
③ MORIYAMA, Mikihiro, “Poet in an Islamic Community: Cultural and Social Activities of Acep Zamzam Noor in Tasikmalaya, West Java”, *Studia Islamika, Indonesian Journal for Islamic Studies,* Vol. 22, No. 2, pp. 269-295. 2015, 査読有
④中谷文美「伝統染織を着るということ―インドネシア、バリ島の手織り布の地域内自給とその変容」『文化共生学研究』12：1-20、2013、査読有
⑤TSUDA, Koji, “The legal and cultural status of Chinese temples in contemporary Java”, *Asian Ethnicity* 13(4): 389-398, 2012, 査読有

〔学会発表〕（計５件）
①NAGATSU, Kazufumi, “The Bajau as a Maritime Creole: Periphery, Modality and Ethnic Process in Wallacean Sea, Southeast Asia”, in International Borneo Research Council Conference (BRC 2014), 2014 年 8 月 6 日, Kota Kinabalu: Universiti Malaysia Sabah
②KANEKO, Masanori, “Redundancy as a key for sustainability of Modern?: A cultural anthropological view of daily life in Indonesia”, in Second Biannual Conference on Anthropology and Sustainability in Asia, 2014 年 3 月 17 日，広島、KKR ホテル
③ NAKATANI, Ayami, “Cross-cultural consumption of cultural heritage: Weavinf and wearing traditional textiles in Bali and Beyond”, in The 17th World Congress of International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2013 年 8 月 06 日、University of Manchester, U. K.
④ TSUDA, Koji, “Research on 'Chinese Traditional Religion' in Post-Soeharto Indonesia”, in Seminar on Chinese Indonesians, 2012 年 08 月 31 日, The Indonesian Institute of Sciences (PMB-LIPI), Jakarta
⑤NAGATSU, Kazufumi, “Genealogy of the Maritime Creole and its Socio-ecological Settings in Wallacea,” in Asian CORE Program Seminar “Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia”, 2012 年 2 月 28 日、Academia Sinica, Taipei

〔図書〕（計４件）
①中谷文美・宇田川妙子（編）『仕事の人類学：労働中心主義の向こうへ』2016 年、京都：世界思想社、307 頁
②甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子（編）『小さな民のグローバル学―共生の思想と実践をもとめて』2016 年、東京：上

智大学出版会、390 頁
③鏡味治也（編著）『民族大国インドネシア：文化継承とアイデンティティ』2012 年、東京：木犀社、365 頁
④Keith Foulcher, Mikihiro Moriyama and Manneke Budiman (eds.), *Words in Motion: Language and Discourse in Post-New Order Indonesia*, 2012, Singapore: Singapore University Press, pp. 312.

６．研究組織
(1)研究代表者
鏡味　治也（KAGAMI, Haruya）
　金沢大学・人間科学系・教授
　研究者番号：２０２２４３３９

(2)研究分担者
森山　幹弘（MORIYAMA, Mikihiro）
　南山大学・外国語学部・教授
　研究者番号：５０２９８４９４

中谷　文美（NAKATANI, Ayami）
　岡山大学・社会文化科学研究科・教授
　研究者番号：９０２８８６９７

長津　一史（NAGATSU, Kazufumi）
　東洋大学・社会学部・准教授
　研究者番号：２０３２４６７６

津田　浩司（TSUDA, Koji）
　東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
　研究者番号：６０５８１０２２